

いじめが自尊心、感情調節、不安感受性を介して 日常的な解離体験に及ぼす影響

渡辺智紀

臨床心理学研究 東京国際大学大学院臨床心理学研究科 第24号 抜刷
2025年（令和7年）12月20日

いじめが自尊心、感情調節、不安感受性を介して 日常的な解離体験に及ぼす影響

渡 辺 智 紀

要 旨

本研究は、206名の参加者（男性136名、女性70名）を対象に、直接的いじめ被害または仲間はずれの経験が、様々な心理的要因を介して日常的な解離体験に影響を与えるかどうかを検討することを目的とした。構造方程式モデリングの結果、直接的いじめ被害も社会的排除の経験も、不安感受性、自尊心、感情調節困難を介して解離傾向を予測することはなかった。

今後の研究では、追加的な心理的要因と因果関係の方向性の問題を検討すべきである。

キーワード：いじめ被害、大学生、不安感受性、自尊心、感情調節困難、解離体験

目 次

はじめに	第5節 統計解析
第Ⅰ章 いじめに関する研究動向	第Ⅳ章 結果
第1節 いじめが心理学的要因に与える影響	第1節 全体の記述統計と相関分析
第2節 いじめが日常的解離に与える影響	第2節 直接的いじめ被害経験の有無による各変数の差
第3節 いじめが心理学的要因を介して解離に与える影響	第3節 仲間はずれ経験の有無による各変数の差
第Ⅱ章 本研究の目的と意義	第4節 重回帰分析
第1節 本研究の目的	第5節 共分散構造分析
第2節 本研究の意義	第Ⅴ章 考察
第3節 本研究の仮説	第1節 参加者の属性と各変数について
第Ⅲ章 調査方法	第2節 各変数間の関係性について
第1節 調査協力者	第3節 不安感受性と感情制御困難と日常的解離体験の関係について
第2節 調査手続き	第4節 日常的解離体験に心理学的要因が与える影響
第3節 調査材料	第5節 大学生におけるいじめ被害経験が心理学的要因を介して日常的解離体験
第4節 倫理的配慮	

* 臨床心理学研究科 博士課程 修了生

に与える影響

第VI章 本研究の限界点と今後の展望

第VII章 本研究の臨床的意義

はじめに

文部科学省（2013）によると、いじめとは、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している当該児童生徒と一定の人間関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む）」であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているものとする。なお、起こった場所は学校の内外を問わない」と定義されている。

いじめといつてもその程度には差が大きく、いじめを受けた本人が「嫌がらせを受けた」と感じる軽度なものから、犯罪行為として取り扱われるべきと認められ、早期に警察に相談することが重要なものや、直ちに警察に通報することが必要なものまで幅広い。

第I章 いじめに関する研究動向

第1節 いじめが心理学的要因に与える影響

いじめ被害を受けることによって生じる影響には様々なものがあり、例えば、香取（1999）では過去のいじめ体験がその後どのように影響しているかについて、プラスとマイナスの両面から検討する調査を行い、いじめの影響尺度の因子分析を用いて、いじめが「他者尊重」や「他者評価への過敏」、「精神的強さ」「同調傾向」、「情緒的不適応」、「進路選択への影響」に影響を与えることを示した。その他にも、腹が立つ、不安や心配といった否定的な感情の発生（竹村、2001）、心身への影響（坂西、1995）や人間不信（橋迫、1999）を生じさせるなどと様々なものが存在している。さらに、金子（2020）では、大学生117名を対象に調査を行い、「同調傾向」、「情緒的不適応」、「進路選択」への影響を与えることを示している。その他

に、無視・仲間外れの被害者は仮想的有能感が高く自尊感情が低いが、無視・仲間外れの無経験者は仮想的有能感が低く自尊感情が高いということが示されている（松平、蘇、高木、前田2019）。同論文ではさらに、自尊感情が低いことに起因する何らかの行動が相手の攻撃性を誘発し、暴力的ないじめの被害に繋がる可能性が考えられることを示している（松平、蘇、高木、前田2019）。

これらの文献が示しているように、いじめは多くの心理的要因に影響を与えていていることが考えられる。特に、いじめは、様々な心理学的要因の中でも自尊感情、不安、感情調節に作用し、長い人生の中で対人関係や仕事、就学といった事柄に対して影響を与える。そして社会生活に支障が出来ることでストレスが生じるために解離といったさらなる問題を引き起こす可能性が考えられる。次項では、いじめが自尊感情、不安、感情調節、解離に与える影響について詳細に述べる。

i. いじめが自尊感情に与える影響

いじめと自尊感情の関係性については、金子（2020）の研究では、いじめの同調傾向や他者評価への過敏性が自尊感情に負の影響を与えることを示した ($\beta = -.27 > p.05$)。また、吉川ら（2013）の研究では、いじめと自尊感情の関係について、いじめの被害経験者は、いじめ被害の経験がない者と比較して、自尊感情が有意に低いことが報告されている。また、無視・仲間外れの被害経験者は仮想的有能感が高く自尊感情が低いが、無視・仲間外れの被害を経験していない者は仮想的有能感が低く自尊感情が高いことが報告されている（松平ら、2019）。また、いじめ被害経験がある者の自尊感情が低いことに起因する何らかの行動が、いじめ加害者の攻撃性を誘発し、暴力的ないじめの被害に繋がる可能性が考察されている（松平ら、2019）。また、男性の場合は、いじめ被害経験者はいじめ被害を経験していない者と比較して抑うつ及び不安が高い傾向が見られたことが報告されて

いる（荒木, 2005）。

ii. いじめが不安感受性に与える影響

いじめが不安感受性に与える影響については、福井ら（2012）の行った研究により、虐待的養育環境で育った人の不安感受性と解離傾向に正の相関が示されている。また、黒川（2010）の研究により、「何人かの人に繰り返し仲間外れにされること。」や「何人かの人に繰り返し無視されること。」などの間接的いじめ被害を経験したものは不安感情が高くなることが明らかとなっている。さらに、Rodriguez, et al (2020) が、子どもの不安感受性レベルが、内面化問題と仲間内被害経験の両方の前兆となる度合いを検討した。その結果、不安感受性は、一学期および二学期において、子どもが評価した仲間被害と有意に正の相関を示した（一学期 $r = 0.17$ 、二学期 $r = 0.22$ ）。また、他方で Hu, Chou, & Yen (2016) は注意欠陥・多動性障害（ADHD）の青少年における行動的気質特性、併存する自閉症スペクトラム障害（ASD）、いじめの関与と不安および抑うつの関連を検討する研究を行っている。その結果、いじめの被害者であることが、不安の重症度と正の関連を示した（ $\beta = 0.2$, $p < .01$ ）。

iii. いじめが感情制御困難に与える影響

いじめが感情調節困難に与える影響については、大河原（2010）が「過剰適応的な『よい子』の自分と、ネガティブ感情制御困難な『悪い子』の自分との解離を特徴とする自己を構成し、そして青年期以降には『複雑性PTSD』や解離性障害へと発展していくことになる」と考察している。また、大河原（2010）は、「学校場面でいじめられていた生徒が学校でいじめにあり、不登校になった子どもが、適応指導教室という安全な居場所を得たにも関わらず、今度は適応指導教室内でいじめる側になり、激しくきれたり暴力をふるったりするようになると、いじめ被害を受けたことによる感情制御困難の高まりから、今度はいじめ被害者がい

じめ加害者になることもある」と述べており、いじめ被害者が感情制御困難によって加害行動といった問題行動を引き起こす事例についても述べられている。

IV. いじめが解離に与える影響

いじめ被害経験が解離に与える影響については、西松（2005）が解離症状を示す解離性同一性障害者7症例と摂食障害者11症例を比較し、解離と心的外傷の関係を検討する研究を行っている。その中であげられた症例のうち2症例は発祥の契機がいじめ体験であった。また発祥の契機こそ異なるが、心的外傷体験としていじめを経験していた症例が2つ存在している。その他に、山口・織田（2017）の研究では、いじめがストレスフルなイベントの中で、死別や震災に次ぐ高順位でのストレスイベントであることが示されており、同研究内にて、過去のいじめ体験を想起した際には解離の主効果が認められている。

V. いじめと解離の関係

解離症群は心的外傷及びストレス因関連障害群には数えられてはいないが、密接な関係があることが示唆されている（Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5th ed, 2013）。また、ストレスフルな体験は人生の中で多く生じるが、その中でも、いじめ体験が強いストレスフルなイベントであることが山口（2017）の研究によって明らかとなっている。また、心理療法研究会（2010）は、解離を引き起こす要因として「関係性のストレス」を想定しており、関係性のストレスは極めて主観的、個別的で客観的には見極められにくいものであるため、当事者の主観にも注目する必要性を主張している。柴山（2017）の取り上げた症例では、虐待や性的外傷体験などは一切なかったが、小学校から高校まで、いじめ被害を受けていた。その結果イマジナリーコンパニオンを発現し、その病的解離へとつながっていった。更に、後藤（2006）の研究では従属変数を解離性傾向、独

立変数をいじめ被害（有無）と空想傾向（高低）とした2要因分散分析を行っている。その結果、小4～小6の間にいじめ被害を受けた者の主効果が有意となっている ($F = 15.48, p < .1$)。また、小1～小3に受けたいじめ被害と空想傾向の交互作用も有意となっている ($F = 4.69, p < .01$)。

しかしながら、同じいじめを受けた者であっても解離現象を引き起こすものと引き起こさないものがあり、いじめを受けることが直接的に解離症状を引き起こすのではなく、いじめを受けたことによってさまざまな心理学的要因に変化が出来ることで、解離症状を引き起こす可能性が考えられる。さらに、いじめが日常的解離に与える影響についてそのメカニズムを検討した論文は存在しない。そこで、本研究では、過去のいじめ体験が日常的解離に与える影響について検討する。

VI. いじめが大学生の自尊感情、不安感受性感情制御困難に与える影響に関する先行研究

いじめが大学生の自尊感情、不安感受性、感情制御困難に与える影響については、様々な先行研究が存在している。いじめ被害が自尊感情に与える影響については、金子（2017）が大学生117名を対象に、過去のいじめが現在の友人関係と自尊感情に及ぼす影響について検討する研究を行っている。いじめの影響尺度の各下位尺度を独立変数、友人関係の特徴を捉える各尺度、自尊感情尺度を従属変数とする重回帰分析を行った結果、いじめの否定的な影響の「情緒的不適応」は価値観 ($\beta = -.37, p < .01$)、葛藤解決効力感 ($\beta = -.45, p < .01$)、自尊感情 ($\beta = -.31, p < .01$) に有意な負の影響を与えていた。また、水谷・雨宮（2015）は、大学生208名を対象に、過去のいじめ経験が自尊感情とウェルビーイングを与える影響について研究を行っている。その結果、直接的小学生の時にいじめ被害を経験したものは自尊心を低下させ、ウェルビーイングに影響を与えていていると考えら

れている。さらに、長田・相澤（2021）は大学生458名を対象に、いじめの長期的被害である自尊感情の低下と体験への意味付けについて、いじめ被害からの回復を検討する研究を行っている。その研究の中で、過去のいじめ被害が直接に現在の自尊感情を低下させていることが明らかとされている ($r = -.18, p < .01$)。

いじめ体験が不安感受性に与える影響については、岡安・高山（2000）が宮崎市内およびその周辺地域（宮崎郡内）の国公立中学校11校（計199クラス）の1～3年生の生徒7,081名を対象に行っている。その結果、抑うつや不安、自尊心の低下、心身症、対人不安などの不適応症状が現われることが明らかにされている。

第2節 いじめが日常的解離に与える影響

i. 解離の定義

解離とは、様々な人間により複数の定義が生まれてきていているが、パトナム（2001）はこれらを要約し、「正常ならばるべき形での意識と体験との統合と連携が取れていないことを一つの条件とする概念」と定義している。また、Sevillano *et al* (2017) は「身体表現性症状と転換性症状の両方が解離として理解される可能性があることを考慮すると、解離はアクセス可能であるべきプロセスの分離と定義される」と語っている。現在、解離性障害と呼ばれている心理現象は、当時は統合不全の名で考察されてきた。統合不全について、松本（2012）は「私たちが受け取る感覚事象が個々バラバラに散在したままになっていて、一つのシステム（体系）に統合されていない現象を示す」と説明している。医学の分野では、Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-5精神疾患の診断・統計マニュアル（American Psychiatric Association, 2013）によって「意識、記憶、同一性、情動、知覚、身体表象、運動制御、行動の正常な統合における破綻および/または不連続である。」と定義されており、Table 1のような症状があると挙げられている。

本研究では、上述のような重篤な解離症状で

はなく、日常的に起こりうる解離である「日常的解離」に焦点を当てて研究を実施する。次項では日常的解離体験について概説する。

Table 1 DSM-5による解離症状別の診断基準

解離症の種類	DSMによる診断基準
解離性同一性障害	<p>A 2つまたはそれ以上の、他とはっきりと区別されるパーソナリティ状態によって特徴づけられた同一性の破綻で、文化によっては憑依体験と言ふ。同一性の破綻とは、自己感覚や意志作用の明らかな不連続を意味し、感情、行動、意識、記憶、知覚、およびまたは感覚運動機能の要素を伴う。これらの徵候や症状は他の人ににより観察される場合もあれば、本人から報告される場合もある。</p> <p>B 日々の出来事、重要な個人的情報、およびまたは心的外傷的な出来事の想起についての空白の繰り返しであり、それらは通常の物忘れでは説明がつかない。</p> <p>C その障害は、広く受け入れられた文化的または宗教的な慣習の正常な部分とはいえない。</p> <p>注：子どもの場合、その症状は想像上の遊び友達または他の空想的遊びとしてうまく説明されるものではない。</p>
解離性健忘	<p>D その症状は物質(例：アルコール中毒時のフラックアウトまたは混乱した行動)や他の医学的疾患(例：複雑部分発作)の生理学的作用によるものではない。</p> <p>A 重要な自伝的情報で、通常、心的外傷またはストレスの強い性質を持つものの想起が不可能であり、通常の物忘れでは説明ができない。</p> <p>注：解離性健忘ほどんどが特定の1つまたは複数の出来事についての限局的または選択的健忘、または同一性及び生活史についての全般性健忘である。</p>
離人感・現実感消失障害	<p>B その症状は、臨床的に意味のある苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能障害を引き起こしている。</p> <p>C その障害は、物質(例：アルコールまたは他の乱用薬物、医薬品)、または神経疾患または他の医学的疾患(例：複雑部分発作、一過性全健忘、閉鎖性頭部外傷、外傷性脳損傷の後遺症、他の神経疾患)の生理学的作用によるものではない。</p> <p>D その障害は、解離性同一症、心的外傷後ストレス障害、急性ストレス障害、身体症状、または認知症または軽度認知障害によってうまく説明できない。</p> <p>A、離人感、現実感消失、またはその両方の持続的または反復的な体験が存在する。</p> <p>(1) 離人感自らの考え、感情、感覺、身体、または行為について、非現実、離脱、または外部の傍観者であると感じる体験(例：知覚の変化、時間感覚のゆがみ、非現実的なまたは存在しない自分、情動的およびまたは身体的な麻痺)。</p> <p>(2) 現実感消失、周囲に対して、非現実または離脱の体験(例：人または物が非現実的で、夢のような霧がかかった、生命をもたない、または視覚的にゆがんでいる、と体験)</p> <p>B 離人感または現実感消失の体験の間、現実検討は正常に保たれている。</p> <p>C その症状は、臨床的に意味のある苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域の障害を引き起こしている。</p> <p>D その障害は、物質(例：乱用薬物、医薬品)または他の医学的疾患(例：てんかん発作)の生理学的作用によるものではない。</p> <p>E その障害は、統合失調症、パニック症、うつ病、急性ストレス障害、心的外傷後ストレス障害、または他の解離症のような、他の精神疾患ではうまく説明できない。</p>
注) 日本精神神経学会(2014). DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル P290. 解離性同一症 / 解離性同一性障害, P296. 解離性健忘, P300. 離人感・現実感消失症 / 離人感・現実感消失障害より	

ii. 日常的解離とは

舛田（2008）は日常的解離のことを「意識・記憶・同一性・知覚・運動・感情の遮断・喪失が一時的・限定的なもの。本人に自覚があり、それらの体験から自分の意志である程度戻ることができる統制性のある解離」と定義した。また、日常的解離体験は正常解離とも呼ばれており、正常解離とは、授業中に空想をして授業が聞こえていなかったり、読書やある作業などに周りの音が聞こえないほど没頭するなど誰でも体験しうるものであり、日常生活に支障をきたさない程度のものである。日常的解離は日常生活の中でごく一般的に存在している（王他, 2018；田辺・雨宮, 2001）。具体的には、没入体験、習慣的活動の自動化、イマジナリーコンパニオンなどが知られている（心理療法学会, 2010）。しかし、病的な解離と比較すると日常生活に悪影響がないといえるが、一方で、日常的解離によってつらい思いをする人達も存在しており、不安の原因にもなっているケースも存在する（心理療法研究会, 2010）。本研究では、このように健康的な一般成人であっても起こりうる解離体験について検討する。

第3節 いじめが心理学的要因を介して解離に与える影響

i. いじめが心理学的要因を介して日常的解離に与える影響に関する先行研究

いじめ被害と病的解離を取り扱った研究はすでに多く行われてきている。例えば、後藤（2006）の研究では、高1～高3にいじめ被害を受けたものの空想傾向の交互作用が有意傾向となっている ($\chi^2 [1] = 3.14, p = .077$)。更に、同研究内にて単純主効果検定の結果、空想傾向高群において被害経験者のほうが病的解離の人数の割合が有意に多いことも明らかとなっている ($\chi^2 [1] = 7.50, p < .01$)。

一方で、いじめと日常的解離体験を取り扱った研究は行われていない。

ii. モデル検証の臨床的意義

本モデルを検証することにより、直接的いじめ被害と仲間はずれ経験が自尊感情、不安感受性、感情制御困難に影響を与える、その結果日常的解離体験に対して影響を与えていたのかを検討する。これにより、いじめ被害体験がどのような心理的要因に対して影響を与える、最終的に解離体験にどのように影響を与えていたのかが明らかになる。このようなメカニズムが証明されることで、解離体験の軽減の為に介入可能な心理学的要因を同定するための基礎的な知見となりうると考えられる。

第Ⅱ章 本研究の目的と意義

第1節 本研究の目的

いじめ被害体験が解離傾向に対して影響を与えていたことは、先行研究によって明らかとなっている。しかし、直接的な関係を明らかとしたものであり、いじめ被害体験がどのような心理的要因に影響を与える、解離傾向を強めているのかは明らかとされていない。

そこで、本研究では、過去に受けたいじめ被害体験が、影響を与えていたことが確認されている不安感受性、自尊感情、感情制御困難が日常的解離体験に対して影響を与えていたのではないかについて明らかにすることを目的とする。

第2節 本研究の意義

本研究では、過去に受けたいじめ被害体験が心理的要因に対して影響を与える、最終的に解離体験にどのように影響を与えていたのかを明らかとすることで、過去に受けたいじめ体験の影響に対する対処の方法が明らかとなるだろう。

第3節 本研究の仮説

過去に受けた直接的いじめ被害経験または仲間はずれ経験は、自尊感情の低下と、不安感受性・感情制御困難の傾向を強めることを介して、日常的解離体験を強める。

第Ⅲ章 調査方法

第1節 調査協力者

2022年4月から8月にかけて、首都圏の私立大学に通学する大学生228名に対して、調査用紙を配布し回答があった者を調査協力者とした。記入漏れや記入ミスあった者22名を除く、206名（男性136名、女性70名、平均年齢19.43歳、標準偏差1.28）を分析対象とした。

第2節 調査手続き

2022年4月から8月までの期間に首都圏の私立大学で実施された講義に参加した者に対し、研究に関する説明をしたうえで質問用紙を配付した。その後、同意をとれた者から講義終了後に回収した。回収した質問紙の内容は、個人情報が特定されない形に数量化し、統計解析を行った。

第3節 調査材料

i. 社会統計学的データ

年齢、性別、トラウマ体験の有無について回答を求めた。

ii. いじめの被害経験（水谷・雨宮、2015）

いじめの被害経験として、まずいじめに関わる苦痛を与える行為となるものでは、直接的攻撃と間接的攻撃が考えられる。(Card, Stucky, Sawalani, & Little, 2008) これらを念頭におきつつ、水谷・雨宮（2015）の研究を参考に、直接的攻撃と間接的攻撃の両種類を含むいじめ全般の被害にあたる「嫌なことをされたことや、言わされたことがあり、苦痛が受けたことがある」という直接的いじめ被害経験および、「仲間外れにされて、精神的苦痛を受けたことがある」という仲間外れのいじめ被害経験の2つの質問について、「5：よくあった」、「4：ときどきあった」、「3：あまりなかった」、「2：ほとんどなかった」、「1：全くなかった」で回答を求める。本研究では、いじめ被害経験を測定す

る本項目において4以上（「あった」と評価されるもの）と回答したものをいじめ被害経験有群、3以下（「なかった」と評価されるもの）をいじめ被害経験無群と群分けを行った。

iii. 自尊感情尺度（山本・松井・山成、1982）

自尊感情尺度は、回答者が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚を測定するために用いられる自記式の質問紙である。例えば、「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「色々な良い素質を持っている」などが含まれる。各項目に対して、10項目5件法で回答し、得点可能範囲は10点から50点である。得点が高いほど、自尊感情が高いことを示す。ローゼンバーグ（1965）による既存尺度を山本ら（1982）が邦訳したものであり、邦訳された項目の内容から、内容的妥当性も高いことが示されている。

IV. 不安感受性尺度（ASI）（村中・坂野、2002）

Anxiety Sensitivity Indexは、ASI日本語版 Anxiety Sensitivity Index (Reiss *et al.* 1986) を翻訳し、村中・坂野（2002）において、日本語版作成を行った。5件法（「全くそう思わない」を0とし、「非常にそう思う」を4）16項目（「心臓がドキドキするところになると神経質になると、何か精神的な病気ではないかと心配になる」など）。

V. 日本語版感情制御困難尺度（Japanese version of Difficulties in Emotion Regulation Scale:J-DERS）（山田・杉江、2013）

J-DERSは、感情調節困難の程度を測定する尺度である。J-DERSは、感情受容困難、行動統制困難、感情制御方略の少なさ、感情自覚困難の4因子で構成される。例えば、「動搖しているときは、そうした状態が長く続くと思う。」、「動搖しているときは、自分のコント

ロールを失う。」などの項目が含まれる。計16項目について「1. ほとんどない」から「5. いつも」の5件法で回答を求める。本尺度は、山田・杉江（2013）によって内的整合性および構成概念妥当性が確認されている。

VI. Dissociative Experiences Scale（解離体験尺度）（田辺・小川、1992）

Dissociative Experiences Scaleは、回答者の解離体験を、日常的で病理的でない軽度のもの（0点）から、多重人格を典型とする病理的で重度なもの（100点）と評価・測定する質問票である。例えば、「着た覚えのない服を着ていたというような経験がある。」などの項目について、visual analogue response scaleへの回答を0～100点の5点刻みで得点化し、その項目一得点の平均得点として得点を算出する。田辺ら（1992）によって、尺度の信頼性が十分に高いことが確認されている。

第4節 倫理的配慮

本研究は東京国際大学学術研究倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号205607）。

第5節 解析方法

i. 群分けの手続き

本研究ではパターンの群分けを行った。1つ目は直接的いじめ被害経験を測定する項目において4以上と回答したものを直接的いじめ被害経験有群、3以下と回答したものを直接的いじめ被害経験無群と群分けした。2つ目は、仲間外れ経験を測定する項目において4以上と回答したものを仲間外れ経験有群、3以下と回答したものを仲間外れ経験無群と群分けした。本研究では上記2つのパターンにおける解析をそれぞれ行う。

ii. 統計解析

統計解析には、IBM SPSS社の統計解析パッケージソフトであるSPSS ver 28を使用した。まず、全体および直接的ないじめ被害の有無

別、仲間外れ経験の有無別における各変数における基礎統計量を算出した。その後、直接的ないじめ経験の有無による差の検討の為、各変数のt検定および χ^2 検定を実施した。同様に、仲間外れ経験の有無による差の検討の為、各変数のt検定および χ^2 検定を実施した。その後、全体における各変数間の相関係数（Pearsonのr）を算出した。最後に、全体において、いじめ被害経験が心理学的要因を介して日常的解離体験に影響を与えるか否かを検討するため、共分散構造分析を実施した。共分散構造分析にはIBM SPSS社の統計解析パッケージソフトであるAmos ver 28を使用した。

第IV章 結 果

第1節 全体の記述統計と相関分析

まず、全体における各変数の記述統計量および相関係数を算出した。その結果をTable 2に示す。その結果、各変数の記述統計量は先行研究と同程度であることが確認された。年齢、不安感受性尺度の合計得点、自尊感情尺度の合計得点、感情調節困難尺度の合計得点、いじめ被害経験、仲間外れ経験、解離体験尺度の合計平均得点での相関分析を実施した。その結果、年齢と自尊感情との間に非常に弱い正の相関関係が認められた（ $r = .15, p < .01$ ）。次に、不安感受性尺度と自尊感情との間に有意な弱い負の相関関係が認められた（ $r = -.27, p < .01$ ）。不安感受性とその他の変数は有意な弱い正の相関関係が認められた（直接的いじめ被害経験： $r = .32, p < .01$ 、仲間外れ被害経験： $r = .35, p < .01$ 、日常的解離体験： $r = .33, p < .01$ 、感情制御困難： $r = .49, p < .01$ ）。また、自尊感情と日常的解離体験の間に有意な非常に弱い負の相関関係が認められた（ $r = -.16, p < .05$ ）。自尊感情とその他の変数の間には弱い負の相関関係が認められた（直接的いじめ被害経験： $r = -.34, p < .01$ 、仲間外れ被害経験： $r = -.20, p < .01$ 、感情制御困難： $r = -.46, p < .01$ ）。さらに、直接的いじめ被害経験と仲間外れ被害経験の間に中

Table 2 全体の記述統計と相関分析全体の記述統計と相関分析

	1	2	3	4	5	6	7
1 年齢		0.07	.154*	0.01	0.03	-0.03	-0.03
2 ASI 合計			-.266**	.318**	.346**	.334**	.487**
3 自尊感情 合計				-.338**	-.204**	-.162*	-.459**
4 直接的いじめ被害経験					.631**	.244**	.362**
5 仲間外れ被害						.317**	.222**
6 Destotal Ave							.355**
7 DERS Total							
平均値	19.43	34.00	30.02	3.22	2.62	20.48	36.95
標準偏差	1.28	10.63	7.35	1.23	1.34	14.72	11.6
最小値最大値	18 - 25	17 - 75	10 - 48	1-5	1 - 5	0-66	16 - 69

Note DERS = Difficulties in Emotion Regulation Scale, ASI=Anxiety Sensitivity Index

DES = Japanese version Difficulties in Emotion Regulation Scale

いじめ 1 = ハラスメント経験 いじめ 2 = 仲間外れの経験

** = $p < 0.01$ * = $p < 0.05$

程度の正の相関関係が認められた ($r = .63, p < .01$)。直接的いじめ被害経験とその他の変数は有意な弱い正の相関関係が認められた (日常的解離体験: $r = .24, p < .01$, 感情制御困難: $r = .36, p < .01$)。さらに, 仲間外れ被害体験と日常的解離体験および感情制御困難の間に有意な弱い正の相関が認められた (日常的解離体験: $r = .32, p < .01$, 感情制御困難: $r = .22, p < .01$)。最後に, 日常的解離体験と感情制御困難の間に有意な弱い正の相関が認められた ($r = .36, p < .01$)。

第2節 直接的いじめ被害経験の有無による各変数の差

上述の通り群分けを行い, 直接的いじめ被害経験の有無による各変数の差を t 検定あるいは χ^2 検定を実施した。その結果を Table 3 に示す。

χ^2 検定の結果, 直接的いじめ被害経験の有無に男女差は認められなかった。次に t 検定の結果, 自尊感情と日常的解離体験および感情制御困難に有意な差が認められた (自尊感情: $t = -4.41 (402), p < .01$, 日常的解離体験: $t = 2.47 (203.72), p < .01$, 感情調節困難: $t = 5.07 (204), p < .01$)。それ以外の変数に有意な差は認めら

れなかった。

第3節 仲間外れ経験の有無による各変数の差

直接的いじめ被害経験と同様に, 仲間外れ経験の有無に関しても群分けを行い, 仲間外れ経験の有無による各変数の差について t 検定あるいは χ^2 検定を実施した。その結果を Table 4 に示す。

χ^2 検定の結果, 仲間外れ経験の有無による差が認められた ($\chi^2 = 5.54, p < .05$)。次に, t 検定の結果, 自尊感情, 不安感受性, 感情制御困難, 日常的解離傾向に有意な差が認められた (自尊感情: $t = -2.68 (204), p < .01$, 不安感受性: $t = 4.23 (112), p < .01$, 感情制御困難: $t = 3.29 (204), p < .01$, 日常的解離傾向: $t = 3.56 (204), p < .01$)。

第4節 重回帰分析

感情調節困難, 不安感受性, 自尊感情, 直接的いじめ被害, 仲間外れ体験が日常的解離体験に与える影響を検討するため, 対象者全体を対象に, 強制投入法による重回帰分析を実施した。解析では, 日常的解離体験を従属変数とし, 感情調節困難, 不安感受性, 自尊感情, 直

Table 4 仲間はずれ経験の有無による各変数の差

仲間外れ経験有群 (69名)			仲間外れ無群 (137名)		
	最大	最小	平均値 (標準偏差)	最大	最小
年齢	25	18	19.39 (1.30)	22	18
性別			男性38名：女性31名	19.45 (1.277)	, -0.32 (204) .n.s.
自尊感情	48	10	28.12 (7.792)	46	11
ASI	75	18	38.55 (11.712)	69	17
J-DERS	67	20	40.61 (10.644)	31.71 (9.282)	4.23 (112.22) **
DES 合計平均	66.42	3.92	25.49 (16.3)	69	16
				35.10 (11.656)	3.29 (204) **
				56.07	0
				17.96 (13.23)	3.56 (204) **

注) ASI = Anxiety Sensitivity Index

J-DERS = Japanese Difficulties in Emotion Regulation Scale

DES = Dissociative Experiences Scale

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$, n.s. = 有意差なし

Table 3 いじめ被害経験の有無による各変数の差

直接的いじめ被害経験有群 (105名)			直接的いじめ被害経験無群 (101名)		
	最小値	最大値	平均値 (標準偏差)	最小値	最大値
年齢	18	25	19.44 (1.32)	22	18
性別			男性64名：女性41名	19.43 (.455)	0.07 (t) .n.s.
自尊感情尺度	10	48	27.9 (7.78)	17	46
ASI	18	75	36.95 (10.75)	69	17
J-DERS	67	20	40.74 (11.64)	69	16
DES 合計平均	0	64.64	22.94 (15.08)	0	66.43
				17.93 (.997)	2.47 (203.72) **

注) ASI = Anxiety Sensitivity Index

J-DERS = Japanese Difficulties in Emotion Regulation Scale

DES = Dissociative Experiences Scale

* $P < .05$, ** $P < .01$, n.s. = 有意差なし

Table 5 DES を従属変数とした重回帰分析（強制投入）

	B	β	VIF
ASI Total	0.20	0.16 ^{**}	1.42
自尊感情	0.06	0.03	1.32
直接的いじめ被害体験	-0.42	-0.04	1.87
仲間外れ体験	2.61	0.24 ^{**}	1.75
感情制御困難	0.33	0.24 ^{**}	1.60
R^2		0.20	

注) ASI = Anxiety Sensitivity Index

J-DERS = Japanese Difficulties in Emotion Regulation Scale

$** = p < .01$

接的いじめ被害、仲間外れ体験を独立変数とした。その結果を Table 5 に示す。

重回帰分析の結果、不安感受性、仲間外れ経験、感情制御困難が、日常的な解離体験に影響を与えることが確認された（不安感受性： $\beta = 0.16, p < .01$ 、仲間外れ経験： $\beta = 0.24, p < .01$ 、感情制御困難： $\beta = 0.24$ ）。また、決定係数 R^2 は .20 であった。本分析の全ての変数に多重共線性は認められなかった。

第5節 共分散構造分析

i. 直接的いじめ被害経験が心理学的要因を介して日常的な解離体験に与える影響

直接的被害経験の頻度の素点、自尊感情の合計得点、ASIの合計得点、DERSの合計得点とDESの合計平均点を潜在変数として、直接的いじめ被害経験が心理学的要因（自尊感情、不安感受性、感情調節困難）を介して日常的な解離体験に与える影響のメカニズムについて検討するため、共分散構造分析を実施した。その結果を Figure 1 に示す。

本モデルの適合度は、 $GFI = 0.87, AGFI = 0.52, RMSEA = 0.29, \chi^2 = 74.92 (df = 4, p < 0.001)$ である。GFI 及び AGFI は 1 に近いほど、RMSEA は 0 に近いほどデータの当てはまりが良いとされることから、本モデルの適合度は低いと判断される。

ii. 仲間はずれ経験が心理学的要因を介して日常的な解離体験に与える影響

仲間外れ経験の頻度の素点、自尊感情の合計得点、ASIの合計得点、DERSの合計得点とDESの合計平均点を潜在変数として、仲間外れ経験が心理学的要因（自尊感情、不安感受性、感情調節困難）を介して日常的な解離体験に与える影響のメカニズムについて検討するため、共分散構造分析を実施した。その結果を、Figure 2 に示す。本モデルの適合度は、 $GFI = 0.84, AGFI = 0.39, RMSEA = 0.17, \chi^2 = 27.19 (df = 4, p < 0.001)$ である。GFI 及び AGFI は 1 に近いほど、RMSEA は 0 に近いほどデータの当てはまりが良いとされることから、本モデルの適合度は低いと判断される。

第V章 考 察

本研究では、直接的いじめ被害経験および仲間はずれ被害の経験が、自尊感情、不安感受性、感情調節困難を介して、日常的な解離体験に影響を与えるのかを検討した。以下に本研究で得られた結果を基に考察を述べる。

第1節 参加者の属性と各変数について

i. 本研究の参加者の特徴

本研究は、大学生 206 名（男性 136 名、女性 70 名、平均年齢 19.43 歳、標準偏差 1.28）を対

Figure 1 直接的いじめ被害経験が心理学的要因を介して日常的解離体験に与える影響

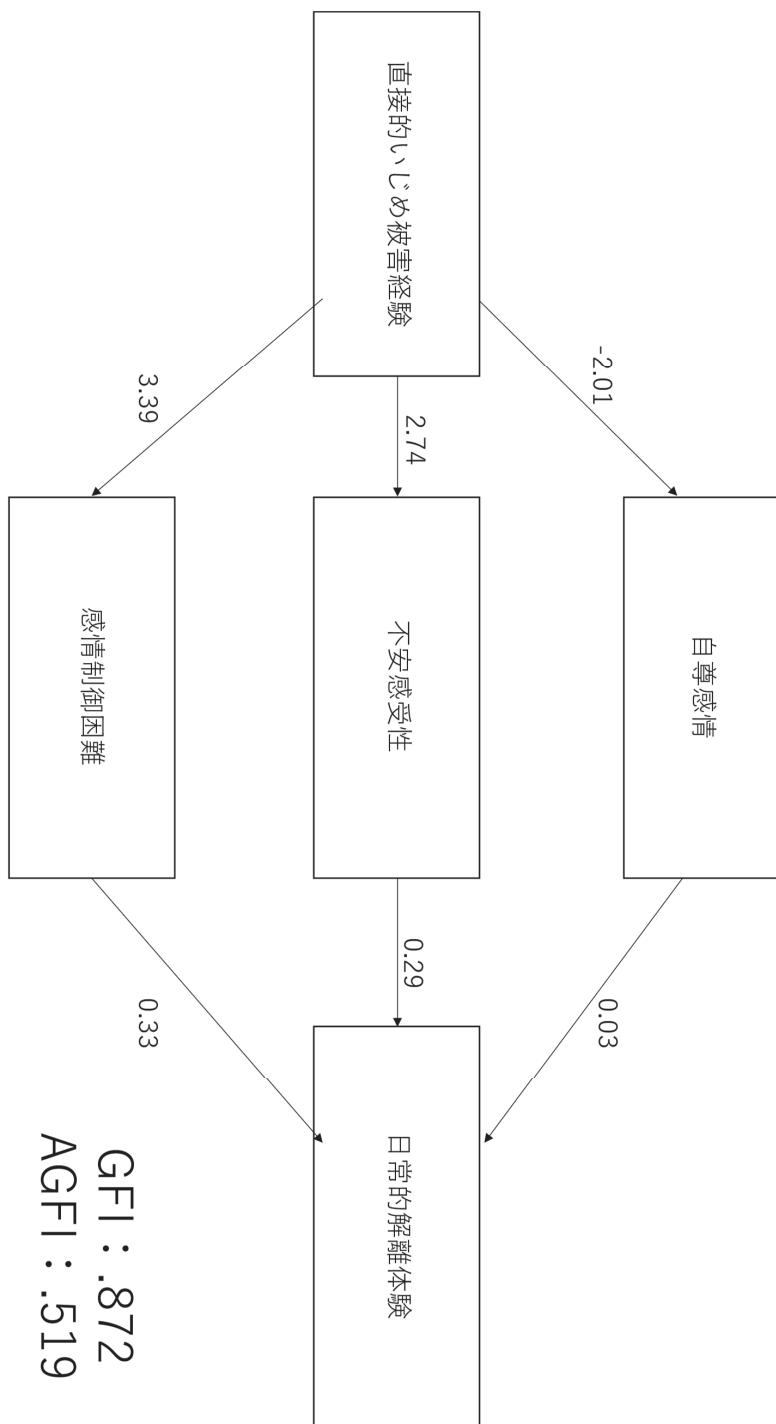
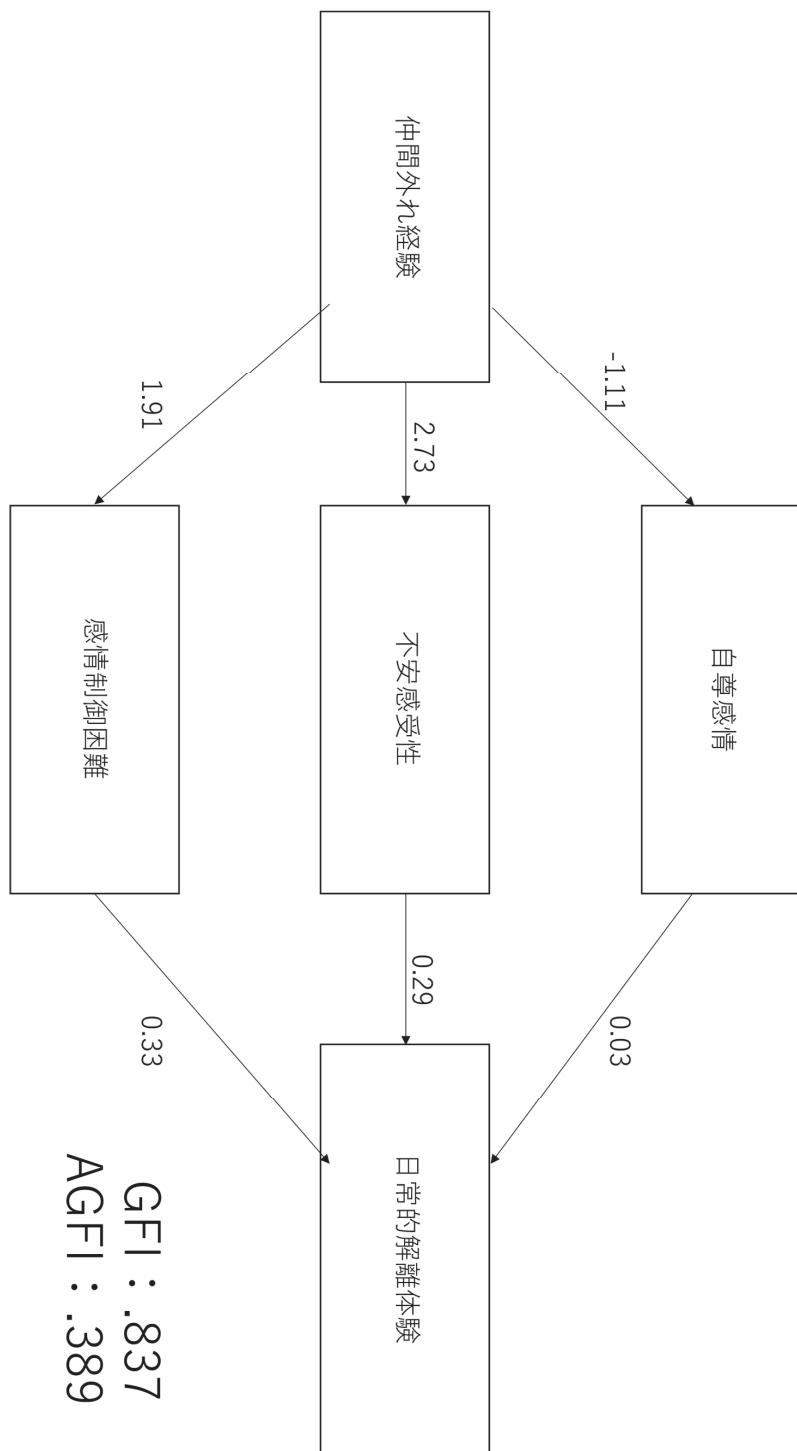


Figure 2 仲間はずれ経験が心理学的要因を介して日常的解離体験に与える影響



象に調査を行った。以下に、先行研究を基に、本研究の調査参加者の属性を考察する。

まずははじめに、不安感受性を取り扱った先行研究では、村中・坂野（2002）が不安障害と診断された者78名を対象に行い、ASIの合計得点の平均値が32.6（標準偏差11.01）であることを報告した。本研究の参加者のASIの合計得点の平均得点は34.0（10.6）であり、先行研究と同程度の平均得点であるが、比較する母集団が臨床群であることを考慮すると、本研究の対象者の不安感受性は健常群と比較してやや高い水準である可能性が考えられる。

次に、感情制御困難を取り扱った先行研究では、杉江（2013）が大学生・大学院生457名を対象に行い、平均値が42.27（15.06）であった。本研究の参加者の感情制御困難の合計得点の平均得点は36.95（11.60）であり、先行研究と比較すると同程度の平均得点であると考えられる。このことから、本研究の対象者の感情制御の能力は先行研究と比較して、同程度であると考えられる。

また、直接的いじめ被害経験、仲間はずれ被害を取り扱った先行研究では、水谷・雨宮（2015）が大学生208名を対象に行っている。水谷・雨宮（2015）においては選択肢1から5と回答した割合を開示している。それによると、小学校・中学校・高校において直接的いじめ被害経験について4以上と回答した者の割合は約50%となっている。本研究で直接的いじめ被害経験について4以上と回答した者の割合は、51%であり、直接的いじめ被害経験を体験した者の割合は先行研究と同程度であると考えられる。

同様に、仲間外れ経験について4以上と回答した者の割合について、水谷・雨宮（2015）では約30%程度であることが示されている。他方で本研究では、仲間外れ経験について4以上と回答した者の割合は、33.5%であり、仲間外れ経験を体験した者の割合は先行研究と同程度であると考えられる。

最後に、日常的解離体験を取り扱った研究

は、田辺・小川（1992）が大学生500名を対象に行っている。その結果、DESの合計平均点19.46（10.40）であった。本研究のDESの合計平均点は、20.48（14.72）であり、先行研究と比較すると同程度の合計平均得点であると考えられる。このことから、本研究の対象者の日常的解離体験の経験頻度は先行研究と比較して、同程度であると考えられる。

以上のことから総合して考察すると、不安感受性の水準はやや高いものの、それ以外の変数の得点は、先行研究の得点類似する値であり、本研究の参加者の特性は平均的であり妥当であると考えられる。

第2節 各変数間の関係性について

i. いじめ被害経験と自尊感情について

本研究では、各変数の関係性を検討するため相関分析を実施した。その結果の解釈について以下に述べる。研究の結果、いじめ被害経験と自尊感情の間に弱い負の相関関係が認められた。このことは、いじめ被害経験が多ければ多いほど、自尊感情が低いという関係性を示している。いじめ被害と自尊感情の関係については、水谷・雨宮（2015）の研究によると、直接的いじめ被害経験では、小学生の時点での直接的いじめ被害経験と自尊感情の間に $r = -.28$ ($p < .01$) の値を見出している。他方で、水谷・雨宮（2015）では、中学生および高校時点でのいじめ被害経験と自尊感情の間に有意な相関関係は認められていない。本研究では、直接的いじめ被害経験と自尊感情の間に $r = -.34$ ($p < .01$) の値が認められており、同程度の値が示されている。なお、本研究では、小学校・中学校・高校の時点での時期の区別を行っていないため、時期の影響については検討されていない。このことから、どの時点においていじめ被害を経験しているかは関係なく、大学生の時点において、直接的いじめ被害経験の頻度が自尊感情の低下に関係している可能性が示唆される。このように、直接的いじめ被害経験が、個人の心理学的要因に否定的な影響を与えること

は、いじめの否定的な影響の「情緒的不適応」や「他者評価への過敏」は自尊感情に負の影響を与えていていることを示した金子（2020）が行った研究とも一致する。

そして、仲間はずれ経験と自尊感情の間に、弱い負の相関関係が認められた。このことは、仲間はずれ経験が多ければ多いほど、自尊感情が低いという関係性を示している。仲間はずれ経験と自尊感情の関係性については、水谷・雨宮（2015）の研究によると、直接的いじめ被害経験では、小学生の時点での仲間はずれ経験と自尊感情の間に $r = -.24$ ($p < .01$) の値を見出している。さらに、中学生の時点で $r = -.15$ ($p < .05$)、高校生の時点で $r = .14$ ($p < .05$) の値を見出している。本研究では、仲間はずれ経験と自尊感情の間に $r = -.20$, $p < .01$ の値が認められており、同程度の値が示されている。なお、本研究では小学校・中学校・高校の時点での時期の区別を行ってはいないため、時期の影響については検討されていない。このことから、どの時期においても仲間はずれ体験は生じており、大学生時点において、仲間はずれ体験が自尊感情の低下に関係している可能性が示唆される。

ii. いじめ被害経験と不安感受性について

いじめ被害経験と不安感受性との間に、有意な弱い正の相関関係が認められた。このことは、いじめ被害経験が多ければ多いほど不安感受性が高まるということを示している。いじめ被害経験と不安感受性の相関を数量的に見た先行研究は存在しない。しかし、岡安・高山（2000）の研究によると、いじめの全般的被害群にはストレス症状が全般的に高い者が多く、関係性攻撃の被害者も特に抑うつ・不安傾向が高いことが示されている。このことから、過去のいじめ被害体験と不安感受性との間に関係性があると考えられる。

そして、仲間はずれ経験と不安感受性の間に正の相関が示された。これは、仲間はずれ経験が多ければ多いほど不安感受性が高まるという

関係性を示している。仲間はずれ経験と不安感受性の関係性についての数量的に示した先行研究は存在しない。そのため、いじめ被害の中からさらに、仲間はずれに限定した研究が必要となってくるだろう。

iii. いじめ被害経験と感情制御困難について

いじめ被害経験と感情制御困難の間には、弱い正の相関関係が認められた。これは、直接的いじめ被害の頻度が多ければ多いほど、感情制御困難も高まることを示している。大河原（2010）は、「学校であうさまざまなトラウマティックストレス（教師からの叱責・恥をかく出来事・友人関係のトラブル・失敗体験・いじめられ・衝撃的な出来事の目撃・失恋など）によってネガティブ感情が喚起されると、過覚醒反応か解離反応により対処することになり、それにより、一般的にはトラウマにならないと思われる出来事であっても、容易にトラウマ反応を引き起こす」と語っている。これは、過去に体験したいじめ被害経験は低減させることが難しいネガティブ感情であり、感情制御を困難にしていると考えられる。このことから、いじめ被害体験と感情制御困難との間には関係性があると考えられる。

そして、仲間はずれ経験と感情制御困難の間に、弱い正の相関が認められた。これは、仲間はずれ経験が多ければ多いほど、感情制御困難が高まるという関係性を示している。仲間はずれ経験と感情制御困難を数量的に示した先行研究は存在しない。しかし、他のいじめと感情制御困難の関係性を見た先行研究では、いじめの種類を分けてはいなかったため、他の先行研究の中で、仲間はずれ被害がいじめ被害の中に含まれていた可能性を考慮する必要があるものと考える。

IV. いじめ被害経験と日常的解離体験について

いじめ被害と日常的解離体験の間には、弱い正の相関関係が認められた。これは、いじめ被害の頻度が多ければ多いほど、日常的解離体験

の頻度が高くなることを示している。いじめ被害経験と日常的解離体験の関係については未だ研究は行われていない。しかし、いじめと病的解離との関係性についての研究はいくつは行われている。西松（2005）が行った研究では、解離症状を示す解離性同一性障害者7症例と摂食障害者11症例を比較し、解離と心的外傷の関係を検討する研究を行っている。その中であげられた症例のうち2症例は発祥の契機がいじめ体験であった。このことから、いじめ被害体験が、解離傾向を強めることが示されている。日常的解離体験もまた、解離傾向の一つであることから、いじめ被害を体験したものが、日常的解離体験に対して、影響を与えている可能性が考えられる。

第3節 不安感受性と感情制御困難と日常的解離体験の関係について

日常的解離体験と感情制御困難の間に有意な弱い正の相関が認められており、山田・山岸（2019）の行った研究においても、男女共に中程度の有意な正の相関を示している（男性： $r = .61, p < .01$ 、女性： $r = .46, p < .01$ ）。このことから、感情制御困難が高まると、日常的解離体験の頻度が高まると考えられる。他方で山田・山岸（2019）が中程度の有意な相関を示したのに対して、本研究では弱い正の相関が出ている。この差は、本研究の調査対象者が感情制御方略を抱えている割合が高かった可能性が考えられる。不安感受性と日常的解離体験には有意な弱い正の相関関係が認められた。不安感受性と解離傾向を取り扱った福井ら（2010）による先行研究においても、不安感受性は解離傾向に対して正の相関を示しており福井ら（2010）を支持する結果となった。このことから、各相関係数が先行研究と同程度のものという結果となったことから、本モデルの基礎としては妥当なものであると考えられる。

第4節 日常的解離体験に心理的要因が与える影響

重回帰分析の結果、不安感受性、仲間外れ経験、感情制御困難が、日常的解離体験に影響を与えていたことが確認された。すなわち、不安感受性、感情制御の困難、仲間外れ体験の頻度が高ければ高いほど、日常的解離体験の頻度が高くなるという関係性を示している。

不安感受性が日常的解離体験に与える影響については福井ら（2012）の論文にてパス係数.29という値が示されており、不安感受性と解離傾向との関係性が示されている。福井ら（2012）は虐待的な養育環境と不安感受性と解離傾向には関連があり、モデルの適合度からも、不安感受性の媒介効果が見られたと考察されている。このことから、不安感受性は解離傾向に対して、影響を与えていると考えられる。しかし、福井ら（2012）の研究においては、性的虐待及び、心的虐待が不安感受性に影響を与えていた。そのため本研究における不安感受性に対して影響を与えていたものが異なっている点に留意する必要がある。

そして、感情制御困難が日常的解離体験に与える影響については、山田・山岸（2019）の研究にて、J-DERSの4つの下位尺度を説明変数、DESを目的変数とし、ステップワイズ法による重回帰分析を男女別に行っている。その結果、男性については、“感情制御方略の少なさ”を投入したときの重決定係数が最も高い値（ $R^2 = .40, p < .001$ ）を示し、女性については、“感情自覚困難”“行動統制困難”を投入したときの重決定係数が最も高く（ $R^2 = .27, p < .001$ ）示されている。このことから、感情調節困難が日常的解離体験に対して影響を与えていると考えられる。

不安感受性、感情制御困難は共に病理的な指標でもあり、これらが影響を及ぼして発生している日常的解離体験は、病的解離の前段階として発生しているのではないかと考えられる。柴山（2017）は解離性障害の初発症状の中で最も多いのは多彩な身体症状と不安であると語って

いる。この不安の体験をなったことに対する、他人の事とするために切り離すことは日常的な解離体験でも起こりえるものだと考える。

また、本研究では、仲間はずれ経験が日常的な解離体験に影響を与えることが示されたが、この関係性を数量的に示した先行研究は存在しない。他方で、柴山（2017）の著書において取り上げられた事例では、孤立状況にあるいじめ被害を受けていたものが周囲に頼れる人物がおらず、イマジナリーコンパニオンを発現するという解離体験を経験したことが報告されている。このことから、仲間はずれにより感じる孤立感が日常的な解離体験に何らかの影響を与える可能性があるのではないかと考えられる。

一方で、直接的いじめ被害と自尊感情は、日常的な解離体験に対して影響を与える結果は示唆されなかった。様々な症例においても解離症を発現された方は、発祥の契機であるか否かにかかわらず、過去にいじめ被害を経験された方が非常に多くみられる。しかし、これらの症例は病的解離であり、日常的な解離体験ではない。そのため、直接的いじめ被害を体験の日常的な解離体験への影響はさらなる調査が必要となる。さらに、岡野（2012）が取り上げた病的解離の症例にて、患者は「自分は生きていても仕方がないと思うことが多かった」と語っており、自尊心が低下していた可能性が考えられる。また、本研究は過去のいじめ体験が現在の日常的な解離体験に影響を及ぼしているかを確認するものであり、過去にいじめ体験を受けたものも、その後に回復している可能性が考えられる。自尊感情も日常的な解離体験に対して影響を与えてはいないという結果となった。自尊感情と日常的な解離体験の研究は数が少なく、また、本研究は一大学内で行ったため、本学生の特色である可能性が考えられる。そのため、より多くの対象者に対して調査を行い、さらなる究明を行う必要性があると考察される。

第5節 大学生におけるいじめ被害経験が心理学的要因を介して日常的な解離体験に与える影響

本研究の目的は、直接的いじめ被害や、仲間外れ体験が、様々な心理学的要因を介して、日常的な解離体験に影響を与えるかについて検証することであった。構造方程式モデルから、直接的いじめ被害や仲間外れ経験のどちらも、不安感受性、自尊感情、感情調節困難を介して解離傾向を高めることは示唆されなかった。不安感受性、自尊感情、感情調節困難を取り扱った先行研究では、ストレスに関する要因（例えば、ストレッサー、ストレス反応、ライフイベントなど）を測定する尺度を使用しているものが多く、ストレス値が高いものほど解離体験をしやすいことが明らかとなっている。また、山口・織田（2017）の研究により、過去のいじめ体験はストレスフルなイベントとなりえていることは確認されている。しかし、本研究では、調査対象者に対するいじめ以外のストレス要因については検討しておらず、いじめ以外のストレス要因が日常的な解離体験に与える影響については考慮されていない。そのため、今後の研究においては、いじめ以外の現在のストレスに関する要因について確認をする必要がある。

また、本研究には因果性のジレンマが存在している。それは、日常的な解離体験の発生により、他の心理学的要因に影響を与えていたのか、それとも自尊感情の低下、不安感受性、感情制御困難の上昇が日常的な解離体験に対して影響を与えていたのか、という問題である。

舛田（2008）は、「対人関係・社会性を重視する成人期前期の段階では、『うわの空・空想』『自動的行動』などの日常的な解離を体験する自己は逃避的であり、一部否定的なものに変容して精神的健康への影響は異なっていくことを示唆している」と語っている。このように、日常的な解離体験を体験したことによって精神的健康への影響が生じる可能性が考えられている。

その他にも、日常的な解離体験に対しては、本研究において検討された自尊感情、不安感受

性、感情制御困難以外の要因が関与している可能性が示唆された。例えば、福井ら（2012）では、性的虐待や心理的虐待が直に解離傾向に影響を与えていたという結果を示している。さらに、大河原（2010）は子どもの感情の情報処理過程におけるダブルバインドが、解離を促すものであると語っている。大河原（2010）が提唱する解離を促すダブルバインドの特性は、①ふたりあるいはそれ以上の人間 ②くりかえされる経験 ③コンテンツレベル「怖い」「苦しい」「痛い」などの身体感覚（大脳辺縁系領域）

④コンテキストレベル「怖くない」「苦くない」「痛くない」などの意味づけとしての認知情報（前頭葉領域） ⑤メタコンテキストレベル 当事者が関係の場から逃れることができない状況である。このような状態にあるとき、子どもは身体感覚としての感情を解離させることでその関係性のシステムに適応すると語っている。

このように、日常的な解離体験を体験したことでの精神的健康への影響が生じる可能性がある。そして、日常的な解離体験、さらには病的解離に対して、自尊感情、不安感受性、感情制御困難以外が影響を及ぼしていることも確認されている。したがって、他の心理学的要因や因果性のジレンマを考慮したうえで、さらなる研究が必要となってくると考えられる。

第VI章 本研究の限界点と今後の展望

本研究にはいくつかの限界があると考えられる。

第一に、本研究における対象者は首都圏の私立大学の人文系の学部に所属する学生である。したがって、成人全体のデータとしては偏りがあると考えられる。そのため、他学部の大学生や幅広い年齢を対象とした大規模な集団を対象に研究を進める必要があると考えられる。

第二に、本研究では、質問紙による回答方法を実施した。その中で、回答のゆがみを考慮す

ることができないため、Paulhus（1991）のバランス型社会的望ましさ反応尺度（Balanced Inventory of Desirable Responding; BIDR）を谷（2008）が邦訳したBIDR 日本語版（Japanese version of Balanced Inventory of Desirable Responding; BIDR-J）などを追加し、回答のゆがみについて考慮したうえで回答を検討することでより精緻な調査が可能になると考えられる。

第三に、日常的な解離体験にはストレスに関連する尺度の影響が強いことが先行研究にも示されているため、本研究においてもいじめ体験という過去のストレス要因のみでなく、現在のストレス要因を追加して検討することで、日常的な解離体験に与えている影響について検討することが可能となるかもしれない。ただし、質問の侵襲性が高くなってしまうことについては配慮が必要であると考えられる。

第VII章 本研究の臨床的意義

本研究の結果、過去に受けた直接的いじめ被害や仲間外れ経験は感情制御困難や不安感受性と関連していることが明らかとなった。このことは、過去のいじめ体験が自尊感情、不安感受性、感情制御困難から、いじめ被害を体験しているその時に、感情制御方略や不安に対する対応の仕方を提供することで、その後の自尊心の低下や不安感受性や感情制御困難が高まることに発展することを可能性の早期解決につながることができると考えられる。

謝 辞

本論文を制作するにあたり、ご多忙の中暖かい激励と、熱心なご指導ご鞭撻を賜りました成瀬麻夕先生、快く副査を引き受けてくださいました高砂美樹教授に心より感謝申し上げます。

また、調査に協力してくださいました東京国際大学の学生の皆様、相談に乗ってくださいました先輩方、同期の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

- American Psychiatric Association: Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5th ed, Washington, DC, 2013 (高橋三郎, 大野 裕監訳, 染矢俊幸, 神庭重信, 尾崎紀夫, 三村將, 村井俊哉訳: DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 東京, 医学書院, 2014).
- 荒木 剛 (2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるリズイリエンス (resilience) に寄与する要因について パーソナリティ研究, 14 (1), 54-68.
- 福井義一・宮本邦雄・牧野日出香・不破崇晴 (2012). 虐待的養育環境と不安感受性が解離傾向に及ぼす影響 日本心理学会第76回大会, 301.
- 橋迫和幸 (1999). いじめ問題と道徳教育の課題 宮崎大学教育文化学部紀要教育科学, 1, 39-68.
- 後藤和史 (2006). いじめ被害が解離に与える影響 —空想傾向の体験ブースト効果を考慮して—, 日本イメージ心理学会第7回大会.
- Hu, H.F., Chou, W.J., Yen, C.F (2016). Anxiety and depression among adolescents with attention-deficit/hyperactivity disorder: The roles of behavioral temperamental traits, comorbid autism spectrum disorder, and bullying involvement kaohsiung journal of medical sciences, 32, 103-109.
- Juventino, H.R., Samantha, J.G., James, T.C., Freddie, A.P., Timothy, A.C (2020). Anxiety Sensitivity and Children's Risk for Both Internalizing Problems and Peer Victimization Experiences Child Psychiatry & Human Development (2020) 51: 174-186.
- 金子功市 (2020). 過去のいじめ経験が大学生に与える影響Ⅱ—いじめ経験が友人関係と自尊感情に及ぼす影響性— 植草学園大学紀要, 12, 27-35.
- 香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, 32, 1-13.
- 黒川雅幸 (2010). いじめ被害とストレス反応、仲間関係、学校適応感との関連—電子いじめ被害も含めた検討—カウンセリング研究, 43, 171-181.
- 岡安孝弘・高山 巍 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410-421.
- 文部科学省 (2013). いじめの定義の変遷 文部科学省 1400030_003.pdf (2023年12月19日).
- 松平 泉・蘇 亮・高木聖実・前田瑞穂 (2019). 大学生の過去のいじめ経験に関する研究—母子関係・仮想的有能感・自尊感情の関連— 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 5, 107-120.
- 松本雅彦・森山公夫・広沢正孝・岡野憲一朗・内海 健・野間俊一・大饗広之 (2012), 解離とは何か, 柴山雅俊 (編), 解離の病理 自己・世界・時代 (pp. 3-24) 岩崎学術出版社.
- 水谷聰秀・雨宮俊彦 (2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響 教育心理学研究, 63, 102-110.
- 長田真人・相澤直樹 (2021). いじめの長期的影響 —体験への意味付けとしての心的外傷後成長に注目して— ストレスマネジメント研究, 17 (1).
- 村中泰子・坂野雄二 (2002). 不安感受性尺度 (ASI) 日本語版作成の試み (2) 日本行動療法学会大会発表論文集 28, 120-121.
- 西松能子 (2005). 外傷的体験は解離に影響するか—臨床的検討— 立正大学心理学研究所紀要, 3.
- Paulhus, D.L & Reid, D.B. (1991). Enhancement and dehial in socially desirable responding. Journal of Personality and Social Psychology, 60, 307-217.
- 舛田亮太 (2008). 青年の語りからみた日常的解離の発達について—事例研究による体験・意味づけ変容モデルの検討 パーソナリティ研究, 16 (3), 295-310.
- 大河原美以 (2010). 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (1) :「感情制 御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 61 (1) 121-135.
- バトナム, F. (2001). 解離—若年期における病理と治療— (中井久夫, 訳), みすず書房, (Dissociation in Children And Adolescents A Developmental Perspective 1997).
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.
- Sevillano, Á.S., & Ordi, H.G, & Gran, B.C, & Pareja, M.Á.V (2017) Psychological characteristics of dissociation in general population Clínica y Salud, 28, 101-106.

- 柴山雅俊 (2017). 解離の舞台 症状構造と治療 金剛出版.
- 竹村一夫 (2001). いじめられた時の行動と気持ち 森田洋司 (監修) いじめの国際比較研究——日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析—— (pp. 93-111) 金子書房.
- 田辺 肇・小川俊樹 (1992). 質問紙による解離体験の測定——大学生を対象にしたDES (Dissociative Experiences Scale) の検討 *Tsukuba Psychological Research*, 14, 171-178.
- 谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17 (1) 18-28.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子. (1982) 認知された自己の諸側面. 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山口朋花・織田信男 (2017). 青年期の「解離」に関する一考察 現代行動科学会誌, 33, 19-30.
- 山田博和・山岸 昌平 (2019). 大学生における解離傾向と感情制御困難性との関連: 男女差に着目して 武藏野大学学術機関リポジトリ, 19, 25-33.
- 山田圭介・杉江 征 (2013). 日本語版感情制御困難性尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 感情心理学研究, 20 (3) 86-95.
- 吉川延代・今野義孝・会沢信彦 (2014). 大学生における過去のいじめ経験に関する質問紙調査——いじめ経験といじめの捉え方、および自尊感情との関係—— 人間科学研究, 35, 155-166.

Abstract

The Effects of Bullying on Daily Dissociative Experiences Via Self-esteem, Emotion Regulation, and Anxiety Sensitivity

Tomoki Watanabe

This study aimed to examine whether direct bullying victimization or experiences of social exclusion influence everyday dissociative experiences through various psychological factors, using a sample of 206 participants (136 males, 70 females). Structural equation modeling indicated that neither direct bullying victimization nor experiences of social exclusion predicted dissociative tendencies through anxiety sensitivity, self-esteem, or emotion regulation difficulties.

Future research should consider additional psychological factors as well as the issue of causal direction.

Keywords: Bullying victimization, University students, Anxiety sensitivity, Self-esteem, Emotion regulation difficulties, Dissociative experiences.